花草木

【ヤマハギ】

ヤマハギ（山萩、学名：Lespedeza bicolor）は、東アジアが原産のマメ科ハギ属の顕花植物※1です。

秋の七草のハギは本種「ヤマハギ」を指します。枝がまっすぐ伸びほとんど垂れ下らない小低木で、山野にふつうに見られます。日本での利用は、観賞用に庭木や公園樹としてよく植えられ、茶花※2として好まれます。マメ科で栄養価が高く、放牧で食べられてもすぐに芽を出して再生力が強いことから、昔は家畜の飼料としても用いられたようです。

ハギには「萩」の漢字があてられており、これは日本で作られた独自の漢字です。また、古株からよく芽を出すことからハギの名には「生え芽」の意味があります。

大阪市内の公園で咲いていたヤマハギの花

※１：顕花植物とは、「花を咲かせて種子を作る植物」のことを指します。
※２：茶花（ちゃばな）とは、茶道の席において飾られる花の総称です。

ヤマハギの花言葉　引っ込み思案、思慮深い、気づかい、思い出、信任

我が署のスタッフ　広島森林管理署
朝田　清子（あさだ　さやこ）（平成28年度採用）

【現在取り組んでいる仕事は？】

広島森林管理署三原森林事務所で森林官業務を行っています。三原森林事務所は、広島県三原市、竹原市、東広島市の中北部及び広島市の一部を管轄区域としています。業務内容は国有林の巡視や調査、間伐などの事業の監督、地元自治体や住民との連絡調整など多岐に渡ります。

事務所で撮影

【職場の雰囲気は？】

三原森林事務所で常時勤務しているのは私だけですが、週一日程度で非常勤職員が勤務するほか、必要に応じて広島森林管理署の担当者と打ち合わせながら仕事をしています。また、収穫調査等で多くの人手が必要となるときには署から応援に来てくれるなど協力しながら業務を行っています。

【林野庁の魅力は？】

転勤があるため、様々な土地に住むことができ、その土地の自然に触れたり美味しいものを食べたりと「地方」を満喫することができます。また、地域によって気候風土や植生が異なるため、現場を歩きながら、その土地土地に合わせた森づくりに関わることができるのも大きな魅力です。

森林事務所等紹介

鳥取森林事務所（鳥取森林管理署）

首席森林官　川村　直樹（かわむら　なおき）

鳥取森林事務所では、鳥取・佐治（さじ）担当区内の国有林約 5,750ha、官行造林約 320ha を管理しています。木材生産を始め森林整備主体の奥山から利用者の多い都市近郊林、国立公園でもある鳥取砂丘に隣接する海岸林まで、上流から下流にわたり多様性に富んだ国有林が存在しています。

当管内の特徴的な取り組みとして、鳥取市市街地の東側にあたる都市近郊林の旧城山（きゅうしょうざん）国有林で修景伐採事業を実施しています。この国有林の山頂には豊臣秀吉が鳥取城を攻めた時の本陣跡があり、鳥取市の背景林としても地域の方に親しまれていることから、自然休養林に指定してご利用いただいています。

鳥取自然休養林（旧城山国有林）

事業地は急斜面で住宅地に隣接する場所での作業となることに加え、花崗岩主体の崩れやすい地質に生えた大径木もあり、伐採から引き上げ作業には細心の注意を払って実行しています。また、残した立木が持つ土壌を保持する役割についても、地域の方に説明し、理解と協力をいただけるよう配慮しています。

この他、今年度の主な森林整備事業として、鍋割（なべわり）国有林、鷲峰山（じゅうぼうざん）国有林で保育間伐を実施しています。国有林の名称にもなっている鷲峰山は標高 921 m、鳥取県西部に位置する大山（だいせん）と同じ独立峰ですが、こちらは山頂まで高木が存在するので、人工林と天然林が混交した美しい風景が見られます。鷲峰山と大山はできた時代は異なりますが、どちらの山も地球のプレート活動によって形作られた経緯があり、位置は離れていても「山はつながっている」と強く感じています。

鷲峰山林道から望む鷲峰山山頂（鷲峰山国有林）

山と山、人と山のつながりを常に感じながら国有林の管理に努めてまいります。

シリーズ『国有林 最前線！』

冬下刈の取り組みについて
～成長期前後における植栽木の成長量等の検証～

岡山森林管理署

1　課題を取り上げた背景

下刈作業の労働負担の軽減や労働安全性の向上を図る観点から、岡山森林管理署では７月～８月を避けて下刈作業を実施する冬下刈を試行しています（写真）。

事業体への聞き取り調査を行ったところ、「身体への負担が軽く、作業効率が上がる」など評価する意見もありましたが、「植栽木が雑草木に被圧され枯死するのではないか」など疑問視する意見もありました。

そのため、冬下刈実施区域における植栽木の樹高成長量や枯死の有無を調査することにより、雑草木が繁茂する夏季以外に下刈を実施した場合でも、植栽木は枯死せず成長するのか検証することとし、冬下刈実施前の令和５年と冬下刈実施後の令和６年の共に５月～11月の期間において植栽木の樹高調査と定点撮影を１カ月毎に行いました。

冬下刈作業の様子

2　実行結果と考察

調査結果から、冬下刈でも植栽木は枯死することなく成長することがわかりました。

冬下刈実施後は雑草木に被圧される夏までの間に一定の成長が確認できたことから、植栽木は枯死せず成長するのかという疑問を解消する結果が得られました。

	夏下刈	冬下刈
メリット	・最適な成長の促進 ・下刈後翌年の雑草木の再生力低下を促す	・労働安全性の向上 ・身体への負担軽減 ・誤伐のリスク低下
デメリット	・酷暑による命の危険 ・危険生物との遭遇 ・林業従事者の離職	・夏下刈りに比べ成長が遅れる可能性

（表）夏下刈・冬下刈のメリットとデメリット

これらのことから、「労働安全性」や「植栽木の成長」など、どの視点に重きを置くのかにより下刈時期を夏季に限定せず、冬下刈を下刈方法のひとつの選択肢として考えてよいのではないかと考えています。